

俺が虚の女王様？！

修司

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブラック★ロックシユーターによって萌えに目覚め、かぐやさまをみてラブコメの波動に再び目覚めた作者による二次小説です。

転生することになつた主人公ことハイプリエステスは崩れかけた世界にて一人の少女に出会う。そしてこれから出会うであろう彼女達は、なんと性欲をこれまでに味わつたことがないという超がつくほどの箱入り娘達だった！なぜならその世界には、男は存在しないはずであつたからだ！

目

次

俺が虚の女王様?!

チャリオツツ

取り合ひ

蹂躪

31 23 14 1

俺が虚の女王様？

自分が思うに、神様とはそこまで大層な存在ではないと考えている。というのも今自身が体験していることこそがその証明となるからだ。

「…………」ジー……

「…………」

もうお察しだろう。私は転生した。

転生させた存在曰く、命が増えすぎてあの世が満帆になり始めたためらしい。これをそのままにしておくと現実世界で死者が遺体に憑依し生きてるもの温もりを求めて群れをなすという。そのため現在の魂をあらゆる下の次元世界にばら撒きあの世のパンクをふせぐのだとか。

やつてることは人間と変わらない。外来種を持ち込み放流するのと一緒だ。

とはいえる自分とて真っ当に暮らしてきた男。流石に自分の生きた世界に地獄が顕現となると協力せざるを得ない。

「…………」スリッ
「…………」

転生させる世界はくじ引きによつて決められた。箱の中から一つカプセルを引いて、それを開けた瞬間目の前はもう異世界つて寸法だ。なるほど。そういうバラエティを入れることも転生を楽しめる一つの手というわけだ。

「…………」ムニムニ
「…………」

・・・・・

そろそろ本題に入ろう。

虚の世界に転生しました。

「あ、あの・・・」
「・・・ジー

短編！

ブラック★ロツクシユーテー

さて、まず知らない読者諸君のために説明せねばなるまい。

虚の世界とはアニメ「ブラック★ロツクシユーテー」において登場する主人公ブラックロツクシユーテー等思念体の少女たちの暮らす

世界である。

この世界は数多の現実世界の少女達の思念によつて生まれた世界でそこに暮らす少女達は彼女達のマイナス思考を背負つて戦い続けている。

自分の名はハイプリエステス。タロットカードにおける女帝に相当するカードの名前を持つ男だ。

なぜ男なのに女帝なのかつて？それにはまず自分の存在について語らねばならまい。何度も言うようにこの世界は少女達の思春期の様々な思いによつて構成される。思春期となれば誰しも一回は考えるだろう。

そう、恋愛である。

この体は数多の少女達の青春全力疾走の青臭い妄想によつて生まれた理想の体なのだ。

しかしそれだけではただの入れ物。命は生まれない。だがその体に自分の魂が入り込んだことで本当の意味で生まれることになつた。まずこの世界は数多の少女の思念で出来ている。つまりこの世界において虚の少女達こそが戦士である。その戦士たちとは正反対という意味でこの名を授かつた。

ハイプリエステス誕生の瞬間である。

(いつまでこのままなんだろう・・・)

「・・・・・」

目が覚めた瞬間は驚いた。

あたりは薄暗く機械のいばらのようなものがあたり一面に広がっている。地面は黒と白の格子模様がどこまでも続きその至る所が崩れかけている。

『あ、あれ？俺生き返ったんじや・・・』

当然困惑した。目が覚めたらまるで地獄や気分が悪い時に見る夢みたいな世界が広がっていたのだから。

しばらくはその衝撃によつてその場を動かなかつたが、やがて心細さを感じてあたりの探索を始めた。

『危険な世界なのかな・・・』

一面どこを見渡してもその景色は続く。そして考える。自分はどの世界にうまれたのだろうかと。実はこの世界はすでに何かを終えた後で自分はそんな世界でたつた一人生きていくことになるのではないかと。

そんなマイナス方向に考えが進み出したその時

コツ

少し離れた場所から何か硬いものが落ちたような音が響いた。

『（！人？それとも獣？）』

思わず音の下方を向いたまま固まってしまう。動物とは想定外の事態が起こつた時、なぜか身体が固まる。

どんな世界かもわからない今の状況で自分のこれは自殺行為。わかつているはずなのに状況を見極めようと視線が音のした方向へと向いてしまう。

『な、何が起こつた？この世界の第一住人？頼むからそうであつてくれ・・・』

そうしてゆつくりと視線を向けたその先にいたのは

瞳に蒼い炎をともした少女だった。

自分のテリトリーに何かがいる。

そのことに気づいたのはつい先程のことだ。

自分は宿主である少女を守るため、その少女の痛みを背負うために生まれた。その為の自分の世界に何者かの侵入。これはつまり敵対する存在がいる可能性がある。

駆け足にて現場へと急ぐ。

幸いそこまで距離は離れていたため目的の存在はすぐに見つけることができた。

一度大きくジャンプしてその存在の近くに立つ。そして目の前の存在を視界に入れた瞬間―――

世界が変わった。

話のテンポを無視して解説を入れることを許して欲しい。この世界で生まれた少女達に感情はない。あるのは戦い続ける本能のみ。そう本能。

彼女達には本能のみ。生物における本能および欲求とは主に三つある

食欲、性欲、睡眠欲である。

食欲はない。なぜなら彼女達は何かを口にせずとも生きて行けるからだ。

では残りのふたつは?
その答えは———

「あの、黒岩さん?」

「・・・」ふにふに

あれから目の前に現れた少女の姿を見てここがどの世界かわかつた。最初は死ぬかと思った。というのもこの世界において自分は異物。勝手にテリトリーに入つておいて無事でいられると思わなかつたからだ。

だが彼女は自分を見て一度目を大きく見開いた後自分に背を向けて歩き出した。疑問に思つた思つたのも束の間、彼女は一度後ろを振り返る。

(ついてこい、ということだろうか)

再び前を向いて歩き出した彼女を見て早足についていく。そうしてしばらく歩いているうちに比較的崩れていない道にたどりつく。すると彼女は腰ほどの瓦礫を指差すと自分に視線を向けた。

(?すわれ、ばいいの、かな・・・?)

その岩の面を手で少しほらいゆつくり腰を下ろす。一体何なんだろう? そう考えた瞬間———

「☒☒え?!」

現在の状況を説明しよう。彼女————ブラッククロックシユーテーは岩に座つたのを確認すると膝にまたがつてきたのだ。しかも背中を向けているのではない。自分の方を向いてじつと見つめてくる。

(どういうこと☒)

瞳を見たかと思つたら急に顔を近づけてきたり

「ちよ、近い！」

急に太ももを撫でてきたり

「☒☒」

二の腕を揉んできたり

「☒☒?☒」

まさにされるがままにされていた。

「あのー、えつと……ちょっと近いかなー……なんて」

「……」ジー

(うう・・・・いい匂いと血生臭い匂いが・・・・)

主人公ことハイブリエスティスは現在ブラッククロックシユーテーに驚くほど接近されている。本体が中学生とはいえ流石はアニメの主人公。その顔はとても高いレベルで整っている。

思わず赤くなるが時折漂う血生臭さによつて恐怖も同時に上がつてきている。まさに混乱状態である。

「……黒岩さん？あの、はんのうにこまるとぶうう」

今度は両頬を摘んでむにむにしてくる。あれからだいぶ時間が経つが後どのくらいまでこのままなのだろう。

(この人喋らないし足痺れてきた……役得だけどそろそろ離れてほしい)

しかしそれは予想外に早く終わることになる。

(ん……?)

唐突に摘んでいた手をはなし両頬に手を当てる。そして再び彼女はじつと自分に視線を遣す。なんだろう、と思つたのも束の間。

「え?! ちょ、近い近い近い！ 黒岩さんマジで近いです！」

今度は先程とは比べ物にならない勢いで顔を近づけて来たのだ。その勢いに思わず上体を後ろに下げてしまう。一瞬視界からブラツクロツクシユーターが見えなくなるがすぐまた目の前に現れる。

気がつけば、彼女にまたがられていた。

え・・・
近、顔・・・

綺麗

相手は中学生

なんで
また、え、

混乱状態！

当たり前だ！主人公はただこの世界を歩いていただけである。にもかかわらず目の前の少女はあつてまもない男の顔に急接近している。

読者の方々はこれを見て安っぽいラブコメと考えるかもしない。

だが！かんがえてみてほしい！

最初に記載した通り彼女達には三代欲求のうちふたつはいまだに残っているのだ。ではなぜこれまで彼女達は平氣だったのか。

それはこの世界に男がいなかつたからだ！

女性といえど性欲は少なからず存在する！それがこれまで平氣でいられたのは性欲を知らなかつた。男がいなかつたからにほかならない。

しかし彼女が目にしているのは数多の少女達が夢見る超がつくほどの美形！

その上虚の世界には似合わないほどのおつとりとした雰囲気！

なんだろう。目の前の存在を見ていると、胸の奥がおかしい。冷たいはずのこの体に異様に熱が籠る。

これは何？

触れているのが心地いい。

もつと触れ合いたい。

もつと
もつと

ブラッククロックシユーターの脳内は現在これまでに感じたことのない多福感と湧き上がる何かを制御できずにいた。

ハイブリエスの脳内はもはや混乱しすぎて機能しておらず、ブラックロックシユーターの脳内も自身を制御する気がない。

二つの影はどんどん近づいてゆく。

そしてそれからついに重なり合う 次の瞬間

轟音と共に地面から巨大な剣が生えてきた。

衝撃によつて空に跳ね飛んだハイブリエスティスは再び起動した脳を動かし現場を理解する。

そ
う

「今のはまさか・・・！」ということはこの世界はまだ、第一話□地面を貫いた剣。その根本に巨大な赤い瞳がこちらをのぞいている。その瞳は先程のブラツククロツクシユーターと同じく驚愕を示しているがハイ。プリエスティスはそれに気づかない。

「うわああああああああああッ！死ぬ死ぬ死ぬう！」
気付くわけがない。彼は絶賛大混乱中である

彼は元の世界ではごく普通の中学生だつた。これまで生きてきた15年的人生において天高くまではねあげられるなんて経験あるはずがない。

せつかく転生したのにこれで終わり？

視界の端に赤の瞳に向かって専用の大砲ロツクカノンを撃ちまくるブラッククロツクシユーテーが映る。

もしかしたら助けてくれるかも！本来で有れば彼はそんな単核的な考えはしない。しかし今この状況、自分の身体能力を考えても助かるのは不可能。

先程の反応を見る限り彼女は自分に對して友好的？だつた気がする。

このまま死ぬよりかは！

そう思つてブラツククロツクシユーテーに助けを呼ぼうとした瞬間。

「おぼあ?!」、今度は一体

瞳の向こう。炎の上がる地面の向こうから大量の鎖が自分の体を巻き取つたのだ。そして全身をぐるぐる巻きにしたかと思つたら今度は凄まじい勢いで引っ張つてくる。

その際ブラッククロツクシユーテーと目が合う。彼女は自分に気づくと最初に出会つた時のように瞳を見開きながら自分に向かつて手を伸ばした。

しかし時すでに遅し。

「ああああああああああああああああああああああああああ！」

転生してまだ2時間もたつてないのに
いつたいどうしてこんなことにな?

これからいつたいどうなつちやうんだ?!

あらゆる物語史もつとも早くトラブルに巻き込まれた男、ハイプリエステス。

彼はこれから自信を狙う5人の少女達を相手に奮闘することになる。

そんな彼にどんな未来が待ち受けているのか・・・。

小鳥飛ぶのは青の空。

海に映るは空の青

絵空の青に空の涙

涙の青に小鳥飛ぶ。

「いや飛べませんけどおおおおおお?!」

ブラック★ロツクシユーター二次小説！

作者のラブコメ練習作

俺が虚の女王様？！

始まります！

「まとさあああん！助けてくれええええええええ！」

・・・・むくり

「・・・ええ・・・何? 今 の 夢 ・・・
まどー! 遅刻するわよー!

「あ、はーい!」

チャリオツツ

「・・・・・」 ポト、ポト

「あ、ありがとう・・・」

口に広がる甘い味に意識を向けながら改めて目の前にいる少女に目を向ける。

その少女も言わずもがな、虚の世界の住人の一人である。

重厚そうな鋼でできた薔薇の王冠をブロンドの髪の上に乗せ、両手は鋭いバイクのついた鎧。両足には車輪がついており傍に時計の針のような剣を置いている。

彼女の名はチャリオツツ。

タロットカードのチャリオツツを冠する出灰力ガリの思念体である。

「・・・・・」 ポトポトポトポトポト

「ちょ! 早い早い早い!」

受け渡されたマカロンを食べ終わつた瞬間彼女は再び大量のマカロンを俺に渡してきた。そのあまりの多さにマカロンは両手からこぼれ落ちほとんどが地面に落ちてしまった。

「・・・・・」 ニコニコ

(虚の世界の住人つて感情がなかつたんじやなかつたつけ・・・?)

受け取ったマカロンを食べる自分を見て薄ら笑を浮かべるチャリオツツ。なぜこんな状況になつているか。話は前回まで遡る。

『うわああああああ目が回るうううううう!?』

鎖によつてぐるぐるまきにされた自分はそのまま凄まじい勢いで持ち主のここまで飛ばされていた。ただあまりに遠いところからの捕獲だつたのか体の節々が建造物の角にあたつてしまつている。とても痛い。

『ぐええ、こ、この鎖つてもしかしなくても・・・』

鎖の勢いがだんだん緩やかになつてゆく。それと同時に鎖の彼方の方に一人の少女が立つているのがわかる。それはやがて姿をはつきりさせ、目の前まで来た時点での自分の体を受け止めた。

『や、やつぱテツドマス』
どさり

『だあ!?!』

受け止めたと同時に体を地面に落とす。

彼女の名はテツドマスター。今は詳細は伏せるが、彼女は現在とする思念体によつて支配されている。鎖が体に巻きついたときは考えがまとまらなかつたが、この少女が自分を連れてきたということは・・・

『おろしたと思つたら今度は何!?!』

地面が動いている。否、地面を覆い尽くすほどの何かの上にハイプリエステスは尻餅をついていた。そしてその正体はうずらの卵はどうのサイズの機械仕掛けの蜘蛛で、ハイブリエステスを載せたまま新たな世界へと向かつて行く。

霧が出て、辺りが暗く。

周りのものが少なくなり、光と共にそれは現れた。

「・・・・」

「え、この人形を持ってばいいの？なんだか怖い顔してんな・・・・」

現状を説明しよう。今自分は絨毯のようなものが敷かれたスペースにて目の前の少女、チャリオツツと人形遊びをしている。

あの光の後に現れた世界――――チャリオツツの世界に放り出された俺は彼女の前に連れてこられた。

そのあとの流れはお察しの通り。

目を見開いたかと思つたら子蜘蛛に乗せられ絨毯の場所に案内され今に至る。

流れやすい、と皆さんが攻める気持ちはわかる。しかし考えて見てほしい。目の前の彼女達はその気になれば一瞬で自分をバラバラにできる力を持つた存在なのだ。

なぜか今のところ会っている少女達は自分に対して好意的？だがこれがいつ牙を向くか分からない。

なんなら戦いの余波で死ぬことだつてあるかもしねしないのだ。

「えーと、君つて喋れる？もしくは言葉わかる？」

「・・・・」ニコニコ

（反応がない・・・・）

勘弁してくれ。俺はまだこの世界に来て2時間もたつてないんだ。好意的？なのはこの世界ではありがたいけど俺寿命までまだ長いんだぞ。このままじや体がもたないよ。

(せめて何か喋つてくんねえかなあ・・・この世界の人たちみんなクールすぎるんだよなあ)

チャリオツツは飽きたのか人形を投げ捨てると自分にその無骨な手を差し出してくる。手を繋げ、ということだろうか。いざ差し出してみると正解らしくそのまま足の車輪を動かし始めた。

「おつとつと・・・喋んないなあ。危ないし。」

急に動き出した為急いで立ち上がり彼女の後ろをついていく。そして周りを見渡しながら改めてこの世界の外観について考える。

(まるでまどかマギカの魔女の結界。いや、というより病気の時に見る悪夢をそのまま形にしたみたいだ。いや、この子の精神性の形がある意味・・・)

「ん?」

ふと手の引っ張る力が無くなつたのを感じて前を向く。目の前の通路、その道はまだきちんと整えられてないためかクツキーや陶器のぬいぐるみによつて荒れ果てていた。

「こ、ここに何かあるの?」

「・・・・・

チャリオツツは俺の言葉に少し視線をよこす。すると今度はこちらを向き両手を広げた姿勢で上目遣いを向けた。

「?・ん?え、どういうこと?」

「・・・・

チャリオツツの表情からは何かを掴むことはできない。しかし道、自分、道、自分と視線を交互にさせたことでようやく何をしてほしいのか察することができた。

「あ!もしかして抱っこして運んだほしいの?」

「・・・・・」(くく

よく考えたらチャリオツツの両足はローラースケートの如く車輪がついており整えられた道でなければ進むのは難しいのだろう。

(君でも普通にジャンプしたり歩いたりできただんじや・・・?)

しかし彼女は虚の世界の少女である。大体の無茶は行えるくらいの身体能力はあるはずだし実際劇中にてブラック★ロツクシユートーとこの世界で渡り合つた猛者である。

(うーん、彼女の本体のカガリちゃんも歩けるのに車椅子に乗つてたし……。もしかしたらその分身である彼女も合わせているのかも)

—

(えええ・・・この子つて一応俺と同じで中学生くらいなんだよな。いや、何を意識してるんだ俺! いくら可愛らしくて仕草に愛嬌があつて懐いてるようであつたつて意識する程のことでもある気がしてきた)

チャリオツツが腕を広げた姿勢で固まりハイプリエヌスも屈んだ姿勢のまま固まって。そんな状況が20秒ほど続く。ハイプリエヌスの表情は虚の世界とは似合わないほど奇妙な顔を浮かべ目の前の少女に対してどのように接するかを考えた。

十七

「うおお?」

ハイブリエスティスに抱きつく形で飛び込んだ。

ハイプリエステス。彼も前世は彼女達と同じく中学生であつた。しかし異性との触れ合いなど思春期の彼には遙かに遠い場所の出来事と考えていた。そして現在抱きついてきているのはかなりレベルの高い女の子である。

(うわああああああああああああああ!?)

当然こうなる。

ブラッククロックシユーターの時はあまりの出来事に正常に思考する事が出来なかつたが今回はそうではない。

(え!?これこのまま持ち上げればいいの?だ、どこを持てば…太腿から抱えて、いや痛いかもあああ柔らかい感じががが)

正常に思考できるからこそ今の状況に対応しきれない。しかしその混乱をハイプリエステスは表情にはあくびにも出さない。第三者が見たらハイプリエステスの表情は少し戸惑いを見せて いる困った顔でしかない。

このままというわけにもいかない、とは思つたのだろう。

ハイプリエステスは混乱した状態のままチャリオツツを持ち上げるとその荒れた道を歩き始めた。

チャリオツツの表情は感情がないはずなのにどこかご満悦な様子である。

(落ち着け、落ち着け。そうだ。慌てることはない。この子はあくまで甘えている子供と同じさ。誰だつてふとした時に人肌恋しいことくらいあるさ。今は動搖より、この後どうするのかを考える——)
カプ

チャリオツツはデッドマスターの連れてきたその存在を見て自身の中に何かがわき起ころのを自覚した。自分たちに感情はない。あるのは戦うという本能のみだ。
初めて触れる自分たち以外の存在。わきあがる何かははその存在が自身に近ければ近いほど湧き上がつてくるのを知つた。

そしてそれに抱きついたとき視界に肌の露出した首が映った。この衝動。心地いい気がするが、それと同時に解消したいとも感じた。そしてチャリオツツは、わきあがる何かと自分の感に従つて――――

ハイpriエステスの首を甘噛みした。

「ぬあつ?!な、なになになに?!」

思わず落としてしまいそうになるのをなんとか立て直す。
急に訪れた未知の感覚。それがチャリオツツに首を甘噛みされて
いることに気付いたハイpriエステスはその場から動けなくなつてしまつた。

「ちょ、ちょつと待つて！急になんで！？」

慌てるハイpriエステスに構わずチャリオツツは甘噛みを続ける。
あくまで首に歯を当てるような力加減で首筋に沿つて歯形をつけて
行く。鈍い痛みと同時に唇の柔らかな感触が跡を追うように皮膚を
這い、くすぐつたいような感覚が襲う。

「や、やめてくれ！くすぐつたいし力抜けちゃうから危ない！うあ、
首筋に沿つて噛まないで！」

「・・・・・」

しかしチャリオツツは止める気配はない。もはやハイブリエスティスは恥ずかしいやらくすぐつたいやらで顔は真っ赤になり目元に涙すら浮かべている。それでも構わず、むしろ勢い付け甘噛みを続けるチャリオツツ。

涎に濡れますます敏感になつた首筋に息が当たりまた別の感覚を刺激する。

ただ噛むだけではない。噛んだことで口に浮き出た皮膚に今度は舌先を這わせ出した。それによりこれまでとは比べ物にならない刺激がハイブリエスティスを襲う。そして舌を首筋に大きく這わせ、最後に付いた涎を全て取るかのように首筋に吸い付いた。

「まつて・・・ほんと待つて・・・！これ、なんか、変だ、よ・・・！」

落とさないように彼女を持つ腕に力が籠る。が、足に力が入らなくなつたハイブリエスティスはその場の瓦礫にチャリオツツを抱いたまま両膝をついてしまう。そしてそれを見届けたチャリオツツは漸く首筋から口を離し座り込んだハイブリエスティスを見た。

息が荒くなり真っ赤になりながら座り込むハイブリエスティスを見る。ハイブリエスティスも急に離れたチャリオツツに上目を向けた。チャリオツツの表情は相変わらずの無表情である。

しかし、自分を眺めるその瞳。金色に輝くその瞳に、最初とはまったく違う何かを秘めているのは誰が見ても明らかだった。

噛まれた首筋には歯形がいくつもついており、何回か吸い付いたおかげ丸く腫れた後である。

両者が目を合わせていた。

(何これ・・・！こんなの、どうしてこんな・・・！)

もはやハイブリエスティスは正常に物事を把握できない。

自分よりもはるかに小さい彼女にもはや抵抗する気も起きずについ

た。そしてついた歯形に指先を沿わされたことで再び刺激が走った。

「ツ・・・・・!?」

その刺激により身体が震えた。

指は上へと上がつてゆきやがて頬に当たり、それと同時に両手で頬を挟んだ。

そして混乱するハイブリエステスに、再び近づこうとした瞬間――――

轟音と共に青い炎の弾丸が彼女を貫いた。

取り合い

皆さんは性的欲求が湧いた時どのようにして発散しますか？

いや、言わなくてもいい。なぜならここは18禁ではないですからね。なぜ唐突にこんな事聞くのか？それはチャリオットの行動に關係している。

肉体的接觸の究極、それは皆さんご存知の通りあれである。しかしそれを行うには相手を見つける他に様々な経験や知識を築く事で成り立つ。

何度も口にしてると思うがこの世界の住人は戦いしか経験がない。なんの知識もない状態である。

そんな中でも彼女たちの脳裏にはなんとなくではあるが『一つになりたい』という欲求自体はある。

そう、一つになりたい。

欲求は身体をくつつけることである程度は満たされた。ではその先は？

その答えこそ前回の通り、甘噛みである。

口という粘膜を相手に触れさせる。

それによってチャリオットはこれまで以上の多福感に包まれた。

口に首を含んだまま目の前の相手に視線を向ける。初めて出会う自分たちとは違う何かは自分が口をつけた瞬間びくりと身体を震わせて顔を耳まで真っ赤にさせた。

そつと首筋に舌を這わせる。

それによつてふるふると身体を震わせる。

歯を軽く当てる。

それによつて甘い声を上げ自分の耳をくすぐる。

歯形のついた首筋を吸い上げる。

それによつて自分を支える手に力がこもる。しかし決して不快ではない。

現在チャリオツツは形容し難い感覚に支配されていた。目の前の自分とは違う何か。それがなにかをするたびに自分の中の何かを搔き立てる。

へたれこんだ何かを見下ろす。汗をかき、瞳に涙を浮かべながら身体を震わせる。そして頬をこの世界ではあまり見られない赤に染め上げ自分を見上げている。

視線がこちらを捉えていると分かつた瞬間チャリオツツは自分の中で別の何かがゾクリと湧き上がるのを感じた。

その何かにしたがい目の前の身体を震わせた者の頬に手を当てて――――――

瞬間横合いから突っ込んできた流星に貫かれた。

(・・・・・殺すツ!!!!)

その時チャリオツツは、生まれて初めて殺意を抱いたという。

轟音と共に先ほどまで手を這わせていたチャリオツツが吹つ飛んでゆく。

いきなりのことで混乱する頭をよそに、砲撃の犯人は自分の目の前にコツリと高い足音を響かせて着地した。

「え・・・黒岩さん・・・？」

その正体はこの世界で最初に出会った少女ことブラツクロツクシユーテー。爆風によつてツインテールを揺らす彼女は砲撃の先から自分に視線を向け、それと同時にその動きを止めた。

「・・・？あ、ああ・・・」

改めて自分の格好を思い出してハイブリエスティスは身なりを隠す。現在彼は肩を裸させており、そこから見える肌にはうつすらと汗をうかばせている。瞳は涙を浮かべ息をあらくし、首筋は赤く腫れている。その腫れに視線を向けるブラッククロツクシユーテーの瞳は、無表情ながら動搖している事を伺わす。

（すごい格好を見せてしまった・・・。うう・・・急にあんなことするなんて）

ハイブリエスティスは童貞である。まあ前世も含めて彼はまだ10代前半ほどの年齢であるし、その年で未経験なのは珍しくはない。そんな中で先程チャリオツツから受けた甘噛みは、これまで女の子と深く関わってこなかつた彼からすれば刺激が強すぎた。

（チャリオツツちゃん吹つ飛んでいつたけど大丈夫かな・・・。てかこれつて助けに来てくれたってことかな？）

もしそうなのだとしたらなんだか申し訳ない気分になつてくる。せつかく助けに来てくれたのに肝心の自分は初めて出会う女の子と形容し難い行為をしている。

そんなの普通はイラつとする。作者だってイラつとする。

服を整えてブラッククロツクシユーターに視線を向ける。
そしてその一瞬の間に浮かぶ疑問符。

(あれ?なんか黒岩さん動かない?)

そう、こうして複雑な衣服を治している間何故だかわからないがブラッククロツクシユーターは動かずになぜかじつとしていた。
警戒している?

否

その考えは視線の先のブラッククロツクシユーターの顔を見て覆される。

「え、え?!どうしたの?」
「・・・・・・・・」

そうして視線を向けた先、彼女はツーと鼻血を流しながら固まつていた。思わず自分の服の裾で拭つてやる。

「い、岩でぶつけちゃったのかな?こ、これは酷い・・・」
「・・・・・」

幸い抵抗はされなかつた。

さて、察しのいい方ならわかると思うが彼女はハイプリエステスの艶やかなその有り様を見て思わず血圧が上がつてしまつた。

本来興奮したからといって粘膜の毛細血管はそう簡単に破れない。ではなぜ鼻血を流すのか。

まあ作者が興奮のわかりやすい描写が出来なかつただけだが。

ブラッククロツクシユーターはハイプリエステスに鼻血を拭いてもらうと再び射線上の先にいるであろうチャリオツツに視線を向ける。土煙のたつ大地の向こう側、その中からたまに聞こえてくる機械音。(なんとか無事っぽい?てかこのままどもしかして巻き添え?逃げるか隠れるかしたほうがいいかな・・・?)

そんな事を考えながらも視線は離さない。

新たに人外として生まれ変わった彼とて、元は一般人。目の前で見
目麗しい女の子が砲弾で吹き飛んだのだ。彼女達がいかに超人であ
ろうとそんなものを目にしても心配しない男はいないだろう。

しかしそんな彼の心情など知つたことかとばかりに自体は急変す
る。

「……これってまた囮」

突然ハイブリエステスの体に鎖が巻きつく。
ブラッククロックシユーターもそれに気づいたのか大急ぎで彼に巻
きついた鎖を切り裂こうとする。

一度見た技だ。2度も同じ手はくわない。そんな無意識の考え方も、
煙の中から巨大な蜘蛛型戦車メアリーに乗つたチャリオツツが登場
した事で中断される。

ハイブリエステスとブラッククロックシユーターが飛ばされるのは
同時だつた。片やブラッククロックシユーターは戦車に引かれたまま
彼方に飛んでゆき、片やハイブリエステスは鎖の主である少女の腕の
中に收まる。

知的さを感じさせるメガネに黄緑を強調するウエディングドレス
(あるいは喪服か)頭にはベールを被り、しかしてそれ以上に存在感を
示す機械の角。どこどころにフリルやリボンが飾りつけられており、
片手には巨大な鎌(デットサイズ)を携える。

彼女こそ小鳥遊ヨミの思念体、デットマスターである。

「黒岩さん！」

彼女の腕の中に囚われたハイブリエステスは吹き飛ばされたブ
ラッククロックシユーターに向けて声を上げる。

なんにせよわざわざ自分を助けに来てくれた恩人が彼方に飛ばされる光景を目にしてあせる。

(ど、どうしよう・・・!)のままでは黒岩さんが・・・でも自分にはなにもできないしむしろ足手纏いに・・・)

そんな事を考えながらも、それでも今の状況をどうにかしようと身体を動かす。

「うぐぐ・・・!は、はなして!つて、え?」

しかしそんな事を叫ぶ俺の予想を大きく外れ、デットマスターは意外にも簡単に鎖を解いてくれた。

「・・・・」

「え、と・・・」

簡単に話してくれたことに思わず呆気に取られるハイプリエステス。

そんな彼をデットマスターはこの世界では当たり前の無表情で見つめる。

ハイプリエステスが一步前に出る。

それとは逆にデットマスターは一步後ろに下がる。

「あ、これってもしかして・・・」

その様子にハイプリエステスは前世で見たアニメを思い出す。

彼女の本体、小鳥遊ヨミはブラツクロツクシユーターの本体黒井マトと仲良しになろうとするが、二人の間には チヤリオツツの本体こと出灰カガリが立ちはだかっている。カガリは何かとヨミを束縛し、彼女に近づこうとするマトにマカロンと陰湿な言葉を用いた牽制を行っていた。

そしてそれと同じく骸の世界のチヤリオツツもデットマスターを束縛して共にブラツクロツクシユーターと戦っている。
(もしかして、怖がっている?)

そう、彼女はハイプリエスティスを恐れていた。チャリオツツのお気に入りの自分たちとは違う存在。束縛され、支配下にあるデットスターにとつてハイプリエスティスの機嫌を損ねることはチャリオツツの機嫌を損ねることにつながりかねない。

目の前の存在、私たちの何かを搔き乱す。

このせいで彼女や、自分の本体に何か影響があつてしまつたら？そんなことになればきっと自分は耐えられないだろう。

ほんの一瞬浮かべた悲壯の表情。

しかしそれを、ハイプリエスティスは見逃さなかつた。

正直言つて、この世界に来てから自分はなんだかんで美味しい目に合つている。美少女と言つても過言ではない女の子達から受けるアプローチ。そんな出来の悪いラブコメみたいな目にあう自分。彼女達は二人とも無表情ながら、なんだか楽しそうにしていた。

しかし目の前の少女、デットスターが一瞬浮かべたその表情にハイプリエスティスが申し訳なさを感じさせるのは十分だつた。彼はデットマスターの瞳を見つめ、その言葉を紡いだ。

「ごめんね。急に大声出してびっくりさせちゃつたね。でも、俺もう行かないと……」

そう言うとゆつくりと後ろに下がりハイプリエスティスはやがて走り出した。その言葉に思わず目を見開いたデットスターは走り去るハイプリエスティスに手を伸ばそうとして、立ち止まる。

今あれはなんと言つた？

ごめんと言つたのか？こんな目に合わせた自分に對して？

デットマスターの内心は困惑に埋め尽くされた。

彼女達は言葉は理解しているが喋ることというのはほとんどない。というのも彼女達は本体の負の感情を背負つて戦う戦士である。そこに交わされる言葉はなくただ戦い続けるのみである。

故に彼から放たれたその言葉に「デットマスターは驚愕したのだ。ふわりとした雰囲気の存在である彼。初めて知るその存在に抱いた恐怖、そんなことはその瞬間頭から吹き飛んだ。先程は言葉と語つたが訂正しよう。

彼女はその自分を気遣う（やさしさ）に、この世界では決して得られるはずのないその心に衝撃を受けたのだ。

そしてだからこそ――――――

「・・・・・♡」

これはある意味必然だつたのだろう。

蹂躪

「・・・あの、2人とも?」

「・・・♪」

「・・・♡」

「俺さつきまで走つてて汗とかかいてるからさ、あんまり近づかないで欲しいな、なんて・・・」

「・・・・・」ギュツ

「・・・・・」ピト

「ううう・・・・・」

現在俺ことハイブリエスティスは両手を鎖で縛られた状態でボロボロの屋敷に軟禁されておりそんな自分の両脇には金髪の美少女と緑がかつたウエーブの髪の美女に引っ付かれている。

どうだ。羨ましいか?

俺は恐ろしい・・・。

「・・・」ピタピタ

「・・・」サワサワ

「頼むから汗かいた地肌そんなに触らないで代謝がいいから恥ずかしい・・・!」

「・・・」「ピラツ

「ちよ裾の隙間に手を入れないで……！」

こいついつもつかまつてんな、そう読者が思うのも無理はないだろう。ぶつちやけ作者もそう思っている。

彼が今の状態になつたのは、かれこれ数時間前の事――――――

さて、この後どうしたものか。

現在自分はデッドマスターの素を離れて衝撃音のする方から反対の方向に向かつて走つている。

このままブラック★ロツクシユーターの下に向かつても戦いの足手纏いになるだけだ。というのも今の自分の身体能力は前世とほとんど変わつていないとめただ。

「助けに来てくれたのに離れるのは申し訳なけれど……今は戦いに巻き込まれないようにしなきや」

もちろん他にも理由はある。

このまま遠くに逃げ続けたらおそらく二人は自分を追いかけてくると思う。そうしてどちらかが自分を捕まえたらあとは追いかけつこの始まりだろう。

「……かわいい女の子が戦う。漫画とかでは当たり前なのに、実際見るとあんなに痛々しいんだ」

遠く離れた場所から二人を見る。現在ブラック★ロツクシユーターとチャリオツツはお互いの武器から弾丸と巨大マカロンを放ち、硝煙と甘つたるい香りをあたり一面に吹き出している。

とりあえず追いかけっこになれば互いに攻撃の手をやすめるだろ

う。先延ばしでしかない作戦ではあるがいまの自分にはこれしか思いつかなかつた。

「それにしても・・・」

何故彼女達は自分に関心があるのだろうか。

あえて言わせてもらうが自分はモテたことなどこれまでの人生において一度もない。一度女の子と仲良くなつたことくらいは流石にあるがここまでではなかつたはずだ。

「ましてや出会い数時間しか経つてないのに」

確かに自分の顔はこの世界において整つてこそいるものの、これまでの事態はどう考えても異常だ。

考えても見て欲しい。いくら美男美女といえど道を歩いていただけでここまで過剰な反応が起こりうるだろうか。ましてやハイブリエステスの顔は美形とはいえ芸能雑誌を除けば1人か2人ほどは見つけられるくらいでしかないのだ。

「・・・音が止み始めた。2人とも気づいたかな」

目が痛くなるような道をひたすら走るハイブリエステスは破裂音や破壊音が途中から止んでいることに気がついた。

おそらくどちらかの意識がこちらに向かってきているのだろう。その証拠に今度は何か巨大なものやすごいスピードなものがぶつかるような音が響いていた。

「うう・・・そもそもしてなんで男の俺がこの世界？百合の間に入るみたいで地獄に落ちそう」

訳の分からぬ独り言を漏らしつつも走ることはやめない。あたりにはハイブリエステスとともに一つの足音が響くばかりで静まり返つている。外であるにもかかわらず風の音すらしないその空間は周りのオブジェクトと相まってよりいつそその不気味さ

を――――――

「ん？」

・・・・・もう一つの足音？

ふと、足を止める。

それと同時に止むはずだつた足音は、何故か変なタイミングで止まつたことに気づく。何かがおかしい。

「・・・・・」

目の前に伸びる自分の影、はて？自分の影はこんなふうに複雑な形をしていただろうか？こんな大鎌を持ったドレス姿のよう

な――――――――――――

「・・・・・・・・・・・・ツ▣」ゾクツ

「・・・・・」

何故、何故この距離で気付かなかつたのだろうか。ハイプリエステスは決して鈍いというわけではない。少なくとも半径5mの地点まで何かが近づいたら気配くらい感じるしましてや近づくものも完全に気配を消して近づくなんてことは不可能だ。

であるのに何故だろうか。

何故ハイプリエステスのまうしろにいる存在は、こんなにも近づいているにもかかわらず、ハイプリエステス本人が気づいているにもかかわらず、未だ気配を感じないのだろうか・・・。

ハイpriエスティスは全身から冷や汗を流しながらゆつくりと後ろを振り返る。

「ウワツ~~ツ~~」

「・・・・・・」

彼の目の前に立っていたのは先程自分を離してくれた少女デッドマスターだったからだ。

それもただの目の中ではない、パーソナルスペースなど知ったことかと言わんばかりの50cm先に彼女は立っていた。

その瞬間、響く金属音——

「オグツ~~ツ~~?」

デッドマスターを完全に認識するよりも早く、デッドマスターは持っていた鎖をハイpriエスティスのクビに巻きつけた。

思わずえずくハイpriエスティス。それと同時に急な力が加わったため思わず瓦礫だらけの地面に尻餅をつく。

「ぐツ・・・・!で、デッドマスター、さん? いきなり何を———」

いきなりの奇行にハイpriエスティスは上目遣いにデッドマスターの顔を覗き込んだ。当然ではある、自分には無害とばかりに考えていた少女からの攻撃だ。何はともあれその顔色を伺うだろう。

しかし、ハイpriエスティスはその行動を後悔する。

「・・・・・・」

「ヒエ」

目だ。

某口ボットアニメのような緑の螺旋を描くその瞳。デツドマスターの瞳孔が開ききつっていた。

しかもそれだけではない、陽の光を知らないかのように白い肌に浮かぶ紅、僅かに震えるきめ細やかな唇の端、そこから流れる一筋のよだれ――――――

完全に女の子がしてはいけない顔をして微動だにせずこちらを見下ろしていた。

「くわれる」

ハイプリエステスとて年頃の男だ。エツチなことに興味を抱く思春期である。とはいえそれはまだ一歩か二歩踏み出したかしていない程度の知識しかない。

だがデツドマスターのその浮かべる表情を視界に入れた途端、動物の本能故か、それとも人間としての経験ゆえか、ハイプリエステスの口は自然に言葉を紡いでいた。

――――――――――――――――――――――――――――――――

その後のこと？

もう大体わかつてもらえるとは思うが一応説明しておく。ふつーに持ち帰られてふつーに弄ばれています。なんだこのクソ雑魚主人公と啖く作者をよそに骸の少女2人の行動はエスカレートしていく。

「・・・・・」
「・・・♡♡」ぐいっ

「ぐう・・・・!き、急になんで・・・」

デツドマスターはハイプリエステスの首にかかる鎖を引っ張るとその勢いで引き寄せられた顔を自身に近づける。ハイプリエステスから見たその表情は相変わらず女の子がしてはいけない表情で見る人が見れば110番通報してもおかしくは無い様子である。

息を静かに荒げながらデツドマスターはその鎧によつて包まれた指先（尖っている）をハイプリエステスの頬に僅かに突き立てる。

「ぐ、いつた・・・」

「・・・・」ペろ

「ひやあ！」

チクチクとした感触にハイプリエステスはみじろぎする。

そんな様子を見てなにが楽しいのかデツドマスターは笑みを強め、僅かに流れた頬の血を舐める。先ほどとは異なる未知の感覚にハイプリエステスは思わず悲鳴をあげた。

「・・・・・」むー

それを見たチャリオツツは面白くない、と言わんばかりに頬を膨らませる。

これは自分が先に目をつけていたのだ。

なのにこいつはそれを忘れて好き勝手に遊んでいる。確かに彼女は自分の友達だ。だが自分を差し置いて遊ぶのは気に食わない。

「・・・・・」がしつ

「うあ・・・・、今度はなに――――」

突然だがハイプリエスティスの服装について説明させて欲しい。

彼の格好は法衣をモデルにしたかのような白い服を着ており、全身に拘束具のようにベルトが巻かれている。

一見着にくそうに見えるだろうが、実はこの服は一枚の布のみによつて構成されており、それらをベルトによつて拘束することによつて法衣のような形にしている。

ブラック★ロックシユーターが駆け寄った際に服全体がずり落ちたように肩を露出させていたのはそれが原因だ。

とはいえるで拘束されているこの法衣は意外に丈夫で、ちょっとやそつとでは着崩れることはない。
なぜこの説明をしたのか？

じやま!!

服破られた。

ポテトチップスの袋開ける感じで。

「・・・え？」

ハイプリエステスが思わず惚けた声を上げる。

チャリオツツが突然自分に近づいてきたかと思いきや、いきなり自分が一張羅をポテトチップスの袋を開けるみたいな感覚で破り捨てたのだ。

それなりに丈夫なベルトと、袖にあたる部分を残しあらわになるハイプリエステスの上半身。

突然の行動にデッドマスターも思わず目を見開き、ハイプリエステス本人に至っては未だなにが起こったのかわからないとでもいうような表情を浮かべるのみである。

だがそんなことはお構いなしにチャリオツツは露わになつた上半身に狂氣的な瞳を向けると――――――――

ジユウウウウウウウウウウウウウツ

「ひやあああああ!?」

鎖骨のあたりに思いつきり吸い付いた。

「や、やめてチャリオツツ！い、痛いしくすぐつたい！」

「・・・・♪」

ハイプリエステスの身体に快感にも似た痛みが走る。

チャリオツツの薄く桜色の唇からは卑猥な音が響き渡りそれに伴いハイプリエステスは身をくねらせようとする。しかしその身体は前と後ろで人智を超える力の持ち主たちに拘束されているため抜け出すことはできない。

「あうっ、な、なんでこの子達いきなりこんな、うああっ・・・」

ハイプリエステスは未知の感覚によつて思わずその瞳に涙を浮かべ始めた。しかしそんなことはお構いなしと言わんばかりにチャリオツツの唇はバードキスをするかの如くハイプリエステスの白い肌に赤い跡をつけて行く。

「デ、デットマスターさん、と、止めて。チャリオツツをどうk」

僅かな希望を抱きつつハイプリエステスはデットマスターに懇願した。

このまま行けば自分はどうなるかわからない。唯一動く首を真後ろにいるであろう緑の少女へと向けようと動かす。

次の瞬間――――――――――――――

「グア?!」

—

白魚のような指がハイブリエスティスの口の中へと突っ込まれた。

状況を説明しよう。

ハイブリエスティスはまず座った状態で正面からチヤリオツツの手によつて両腕を拘束され、むき出し�となつた素肌に吸いつかれていた。そしてそんな身動きのできない状態の背後、デットマスターの豊満な胸に押しつけた頭は左手の鎧の指により拘束され、口の中を蹂躪されていた。

対抗しようにも2人がかりの拘束は非凡なバイアリエヌテヌにはどうしようもなく、噛みつこうものならいつその大鎌によつて切り裂かれるかわからない。

「あ、おおう、ああああ・・・」

指は喉奥、うち頬、食道の手前と苦しむハイブリエスを無視して動き回る。

あたりにくちゅり、ぴちやりといつた音が響きそれに合わせて声にならない声を鳴らしながらハイブリエステスは思わず涙を溢れさせた。

そんな様子を見たデットマスターは口を吊り上げ白い頬を赤く染め上げた。よく見れば少し息が上がっているように見える。

デットマスターは目の前の存在の浮かべる涙を見た瞬間胸の内から何かが湧き上がるつてくるのを感じた。

それは先ほど感じていた感情よりもどす黒く、しかし全身を搔き立てるかのような感覚であつた。みじろぎするそれは苦しいのかうめき声をあげており、その声が耳に入るたびに背筋をゾクゾクとくすぐ

らせた。

もつと見たい・・・

本来存在しないその考えに従い、ハイ・プリエスティスの舌を指で掴み軽く引っ張る。

「あええああ・・・」

涙をぽろぽろと流しながら頬を染めうめき声と涎を洩らすハイ・プリエスティス。

ああ、目の前の存在が浮かべるその表情。

だめだ。これはだめだ。

これは自分を歪ませる。

もつとみせろ！

相反する二つの思考。

ダメと考えているにもかかわらず、もはやデットマスターに己を止めるることはできなかつた。

2人の美しい少女によつてゆつくりと何かを壊されて行く少年。

デットマスターは湧き上がつてしまつた欲望のままに、次なる躊躇のためにハイ・プリエスティスへその美しい顔を近づけていつた。